

平成 26 年度

日本伝統治療（柔道整復術）指導者育成・普及プロジェクト  
事業活動報告書



公益社団法人日本柔道整復師会

# 日本伝統治療（柔道整復術）指導者育成・普及プロジェクト

## ホブド県講習会

団 長：本間 琢英（国際部）

根來 信也（国際部）

横田 良介（宮城県柔道整復師会）

五反田重夫（兵庫県柔道整復師会）

指導者候補：エンフタイワン・トゥブシンバヤル

バトムンク・アルタンエルデネ

ムンフバートル・ボロルチメグ



写真1 派遣者、指導者候補、ドライバー

### 日 程

8月23日：出発 本間 根來 五反田 横田  
到着後ミーティング

8月24日：ホブド県へ移動（1）  
バヤンホンゴル県にて宿泊。  
アルタイ指導者候補合流。

8月25日：ホブド県へ移動（2）  
バヤンホンゴル保健所長に  
テキスト・ハンドブックを  
バグ医師に配布依頼。  
ゴビアルタイ県にて宿泊



写真2 バヤンホンゴル県保健所長を囲んで

8月26日：ホブド県へ移動（3）  
ゴビアルタイ保健所長にテキスト・ハンドブックをバグ医師に配布依頼。  
ホブド県へ到着後、会場視察ならびに打ち合わせ

8月27日：講義第1日

午前：開講式

（1）挨拶

ホブド県保健 ツービル所長

（2）TV取材

講義－基本包帯法（アルタイ・トゥブシン・ボロルチメグ）

午後：講義－肋骨骨折理論（アルタイ・横田）

試験－筆記試験



写真3 TV取材



写真4 基本包帯法

写真5 包帯実習

8月28日：講義第2日

午前：講義－肋骨骨折実技（横田）

午後：講義－上腕骨外科頸骨折理論・実技（トゥブシン・ボロルチメグ）

試験－筆記試験



写真6 上腕骨外科頸骨折理論

写真7 上腕骨外科頸骨折固定包帯

8月29日：講義第3日

午前：講義－下腿骨骨折理論・シーネ作成（根来・アルタイ）

午後：講義－下腿骨骨折実技（五反田）

試験－筆記試験



写真8 下腿骨骨折シーネ作成

写真9 筆記試験

8月30日：講義第4日

午前：試験－実技試験

午後：閉講式



写真 10 実技試験



写真 11 感謝状授与

### 8月31日：市民公開講座

9：30 受付 10：00 開始

- |                      |                                      |
|----------------------|--------------------------------------|
| (1) 挨拶               | ホブト県保健所 ツービル所長<br>JICA モンゴル事務所 今吉 萌子 |
| (2) 主催者挨拶            | 国際部 本間 琢英                            |
| (3) 趣旨説明             |                                      |
| (4) 怪我の応急処置について説明、実技 |                                      |
| (5) 質疑応答             |                                      |

JICA 草の根技術協力事業（パートナー型）日本伝統治療（柔道整復術）指導者育成・普及プロジェクトとして、ホブド県のバグ医師 20 名、大医師 2 名を中心に、ザブハン県（4 名）・ゴビアルタイ県（5 名）・オブス県（1 名）・バヤンホンゴル県（8 名）、計 41 名で講習会を実施した（写真 12）。



写真 12 受講生一同

今回の講義では、5 月に完成したテキストならびにハンドブックを用いた最初の講習会となった。また、指導者候補に講義補助ではなく、講義を任せることにより、指導者候補のみで講習会開催ができるようになることを目的とした。

講義終了後の筆記試験結果ならびに当日の講義の振り返り、気づいた点を指導者候補とともにディスカッションすることにより、指導者候補の講義に対する指導方法の向上を目的とした。その結果を翌日の復習に反映し、受講生に対する講義理解度の向上に努めた。

閉講式にて、ホブド県の県立病院勤務の受講生（大医師）より本講習会は、モンゴルの地方医療に大切な内容であり、バグ医師が、柔道整復術を用いることにより県立病院での対応も向上することを期待するとのお礼の言葉があった。

後日、県立病院にて受講生（大医師）により講義で学んだ、下腿骨骨折の整復、固定を実施し、好結果を得ていた。

一般市民公開セミナーでは、43名（男性11名、女性32名）で幅広い年代、特に子供たちの参加が多くあった（図1）。

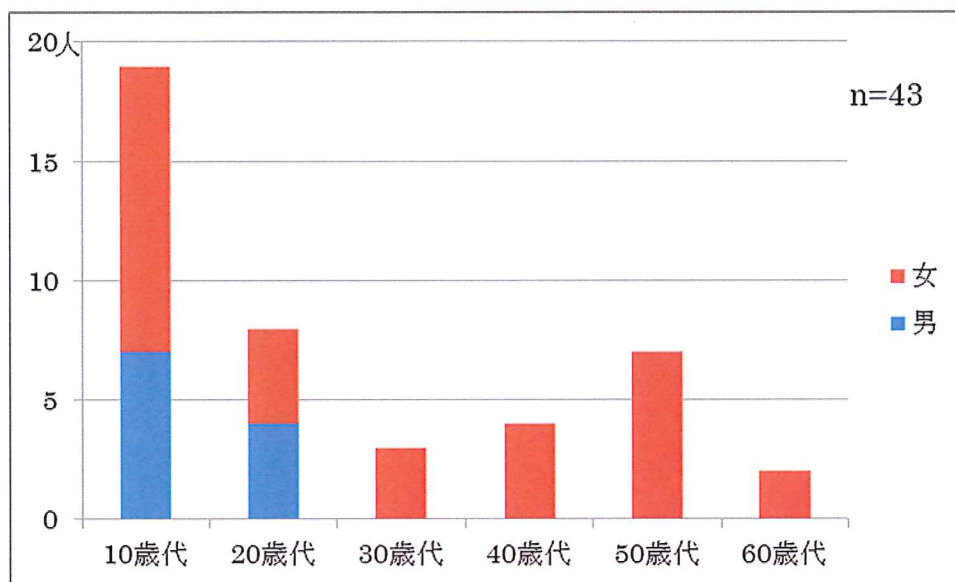


図1 年代・性別受講生内訳

子供の骨折は、成長障害を起こすことがあり、特にケガの応急処置ならびにケガを放置しないことの重要性を啓発することができた。

ケガの応急処置について身近にあるものならびに三角巾を用いた簡単な固定の実技も含めて実施した。市民公開講座より、NHK ワールドの番組の取材が始まった（写真13,14）。



写真13 実技風景



写真14 取材風景

今後、モンゴル国における柔道整復術普及のためには、実際の症例・処置に対してバグ医師間ならびにカウンターパートと共有することが重要で、受講性を中心にディスカッションができる場が必要である。そのためには、各アイマグ（県）の役割が重要である。

# 日本伝統治療（柔道整復術）指導者育成・普及プロジェクト

## バグ医師スキルアップ講習会（ホブド県）

団 長：本間 琢英（国際部）  
根来 信也（国際部）  
横田 良介（宮城県柔道整復師会）  
五反田重夫（兵庫県柔道整復師会）

指導者候補：エンフタイワン・トゥブシンバヤル  
バトムンク・アルタンエルデネ  
ムンフバートル・ボロルチメグ



写真1 会場風景

### 日 程

9月1日：講義第1日

午前：開講式

- (1) 挨拶およびオリエンテーション  
ホブド県保健 ツービル所長  
JICA モンゴル事務所 今吉 萌子

(2) 症例検討

講義－基本包帯法（アルタイ・トゥブシン・ボロルチメグ・根来）

午後：講義－基本固定実技（アルタイ・トゥブシン・ボロルチメグ・五反田）



写真2 開講式



写真3 基本包帯法

写真4 基本固定実技

9月2日：講義第2日

午前：講義－鎖骨骨折理論・実技（五反田）

午後：講義－肩関節脱臼理論・実技（ボロルチメグ・横田）



写真5 鎖骨骨折実技



写真6 肩関節脱臼理論・実技

9月3日：講義第3日

午前：講義－橈骨遠位端骨折理論・実技（トゥブシン）

午後：講義－肘関節脱臼（横田）

肋骨骨折（横田）

試験－筆記試験

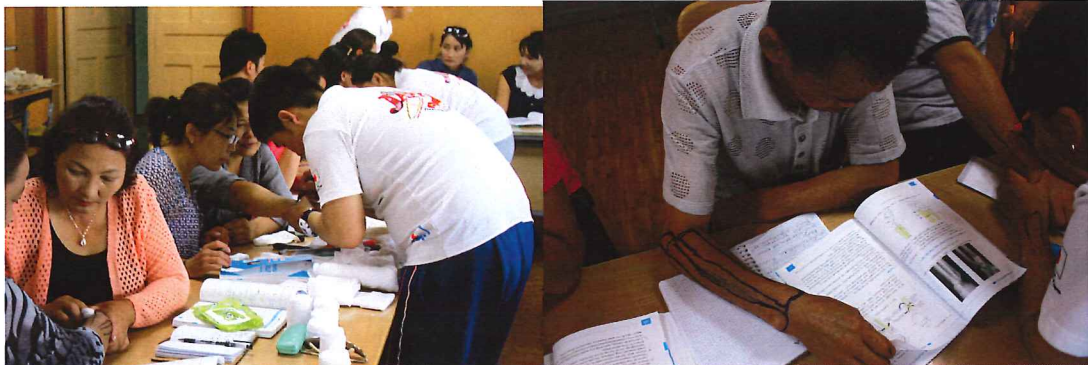


写真7 橈骨遠位端骨折理論

9月4日：講義第4日

午前：試験-実技試験

午後：閉講式



写真8 実技試験



写真9 受講生一同

JICA 草の根技術協力事業（パートナー型）日本伝統治療（柔道整復術）指導者育成・普及プロジェクトとして、ホブド県のバグ医師を中心にスキルアップ講習会を実施した。

受講生はホブド県（24名）、ザブハン県（2名）、ゴビアルタイ県（5名）、オブス県（3名）、計34名の受講生に対して講義を実施した。

今後、モンゴル国における柔道整復術普及のためには、実際の症例・処置に対してバグ医師間ならびにカウンターパートと共有することが重要で、再受講生を中心に外傷治療経験のインタビュー形式にて実施した（別紙資料参照）。

その情報をもとに、閉講式後にディスカッションを行った。その際、ザブハン県のバグ医師2名の受講経験者が積極的に発言し、実際の症例経験および課題を把握することができた。

本プロジェクトも折り返し地点を過ぎ、今後、モンゴル国各アイマグでの症例検討会などを行える環境作りが重要である。

# 日本伝統治療（柔道整復術）指導者育成・普及プロジェクト

## バグ医師スキルアップ講習会（ホブド県）症例検討会

### 再受講者の症例報告

#### 1. ザブハン県 バグ医師 氏名：ドゥグルマ

##### 症例

- (1) コーレス骨折 処置：整復・固定（シーネ固定）  
予後：経過良好にて治癒
- (2) 肋骨骨折 処置：モンゴル伝統の息を吐かせる  
方法と包帯固定  
予後：聞き取りなし



##### 感想

- ・この講習会は現場での治療に非常に役に立つ講習会だ。
- ・患者を家族のように取り扱うことを覚えた。
- ・外傷の患者が来ることを待ち望んでいる。
- ・この仕事は歳を取っても出来る仕事だから有難い。

#### 2. ザブハン県 バグ医師 氏名：ツェヴェルマ

##### 症例

- (1) 肩関節前方脱臼 処置：整復（ヒポクラテス法にて）・  
固定（聞き取りなし）  
予後：経過良好にて治癒  
モンゴル相撲にて受傷（反復性・2回目）  
した症例であった。
- (2) 足関節捻挫 処置：包帯固定  
予後：経過良好にて治癒
- (3) 鎖骨骨折 処置：整復（聞き取りなし）・固定（リング固定）  
予後：経過良好にて治癒
- (4) コーレス骨折 処置：整復した・固定（厚紙＋シーネ固定）  
予後：2014年8月3日負傷で、現在は包帯固定のみで加療中である。



##### 感想

- ・講習会で勉強したことが役立っている。

#### 3. ゴビアルタイ県 バグ医師 氏名：トゥムンバートル

##### 症例

- (1) 肩関節前方脱臼 処置：デゾー包帯固定して県立病院に送った。  
予後：不明
- (2) 股関節の症例 処置：鑑別する事が出来なかった。
- (3) 大腿骨頸部骨折 処置：県立病院に送った。





4. ゴビアルタイ県 バグ医師 氏名：ムンフウティトゥブ  
症例

- (1) 肩関節前方脱臼 処置：家族に協力してもらい整復  
(ピポクラテス法)  
固定：デゾー包帯固定  
県立病院でレントゲン撮影の結果、  
骨折はなし。



- (2) 下腿骨骨折 処置：シーネ固定を行い、県立病院に送った。  
予後：経過良好にて治癒した。

5. ホブド県 バグ医師 氏名：ナルンチメグ  
症例

- (1) コーレス骨折 処置：整復した・固定（シーネ固定）  
予後：2週間後に県立病院でレントゲン撮影  
の結果、経過良好  
同時に母指の骨折もあって、整復を試  
みたが、上手く出来なかった。  
難しいと思った。



- (2) 肩関節前方脱臼 処置：整復（コッヘル法）・固定（聞き取り忘れ）  
35歳、男性でモンゴル相撲にて受傷（反復性）の症例。

スキルアップ講習会受講生で、再受講生7名（オブス県1名、ザブハン県2名、ゴビアルタイ県3名、ホブド県1名）のうち、5名が柔道整復術を用いて、治療を行っていた。

特に、ザブハン県の2名のバグ医師は、2007年7月にザブハン県で行われた講習会に参加して以来、ウランバートルで開催されたスキルアップ講習会にも積極的に参加し、柔道整復術の技術向上に努めている。この取り組みを他のバグ医師が共有することにより、柔道整復術を用いた外傷治療件数が増え、その結果、モンゴル国における柔道整復術の普及につながると考える（写真10）。



写真10 症例検討会風景

今後、このような症例検討報告会ならびにバグ医師による外傷処置件数・内容などのデータを共有できる仕組み作りが必要である。また、それに伴い、モンゴル人指導者候補が症例に応じた指導（講義）を適宜行っていくことが肝要である。

# 日本伝統治療（柔道整復術）指導者育成・普及プロジェクト

## 指導者候補現地活動報告（バヤンホンゴル県）

帯同者：根来 信也（国際部）

指導者候補：バトムンク・アルタンエルデネ

※NHK ワールド取材陣帯同

### 日 程

9月3日：移動（1）

ホブド県からゴビアルタイ県へ移動



写真1 取材打ち合わせ

9月4日：移動（2）

ゴビアルタイ県からバヤンホンゴル県ジャガラントソムへ移動ならびに現地視察



写真2 移動道中



写真3 バヤンホンゴル県ジャガラントソム病院

9月5日：活動（1）

バトムンク・アルタンエルデネ（アルタイ）指導者候補の遊牧民に対する現地活動調査



写真4 バトムンク・アルタンエルデネ指導者候補

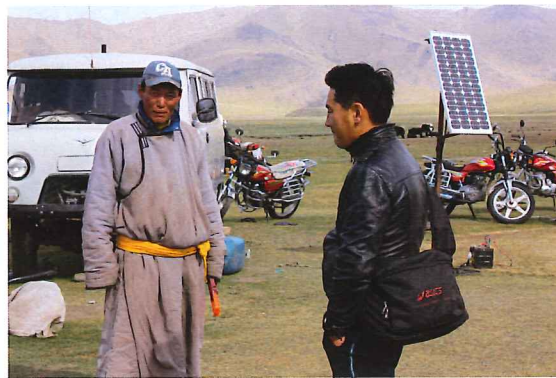


写真5 右肩関節脱臼前方脱臼患者（遊牧民）予後確認

患者（1）：右肩関節前方脱臼

馬を引っ張って歩いていた際に、馬に引っ張られて右肩関節を脱臼する（反復性脱臼）。指導者候補が、ヒポクラテス法で整復するも整復されず、コッヘル法を行い、整復される。今回は、その後の予後確認を今回行った。

ジャガラントソム病院にて、病院視察中、右下腿骨下端部脱臼骨折患者（男性）が搬送され、アルタイ指導者候補が、シーネ固定を行った（写真6,7）。



写真6 アルタイ指導者候補専用処置室



写真7 処置風景

## 9月6日：活動（2）

### アルタイ指導者候補の遊牧民に対する現地活動調査



写真8 右下腿骨中下1/3部骨折患者

### 患者（2）：右下腿骨中下1/3部骨折

2014年6月25日にバヤンホンゴル県都近くで、馬の調教の試合に出場時に、馬に右下腿部を蹴られ、受傷する。県立病院にて診察の結果、右下腿骨中下1/3部骨折にて、患者の住んでいるジャガラントソム病院にて治療を行うように指示があった。

アルタイ指導者候補がシーネ固定を行ったが、大黒柱のため、病院へは1度しか通院せず、以後アルタイ指導者候補が往診を行っている。9月15日、県立病院にて診察予定である。

今回、アルタイ指導者候補の住んでいるジャガラントソムにて現地活動調査を行った。ジャガラントソムは、バヤンホンゴル県都より約180km離れており、道も悪く、車で約4時間かかった。

ジャガラントソム病院はジャガラントソムを含む近隣のソム（市）の4つの合同の病院である。レントゲン設備はなく、外傷患者は、県都までレントゲン確認に行く必要がある。アルタイ指導者候補の話によると、来年にはレントゲン設備が導入される予定である。

病院院長は不在であったが、外科医にアルタイ指導者候補についてインタビューを行った結果、外傷治療専門バグ医師としての評価は高く、日本・ウランバートルでの柔道整復術の研修を高く評価していた。

アルタイ指導者候補が、遊牧民に対して往診を行っているが、移動手段はバイクであり、移動時にはパンクを頻繁に起すほど、道は険しかった（写真9）。往診道中にて、泥酔したまま遊牧民が落馬しており、アルタイ指導者候補が見つめ、的確な診察を行った結果、大きな外傷もなかった（写真10）。



写真9 パンク修理



写真10 落馬患者

アルタイ指導者候補は、往診時、日本研修の記念品のバックを大切に用いていたが、シーネなど固定材料を入れるには小さく、カバンを大きくするとバイクの運転に支障をきたすと思われ、リック式の応が有効であると思われた（写真11）。

病院に来院される患者の多くは遊牧民で、頻繁に来院することは、経済的・距離的に困難であることが調査から明らかとなった（写真12）。



写真11 往診カバン

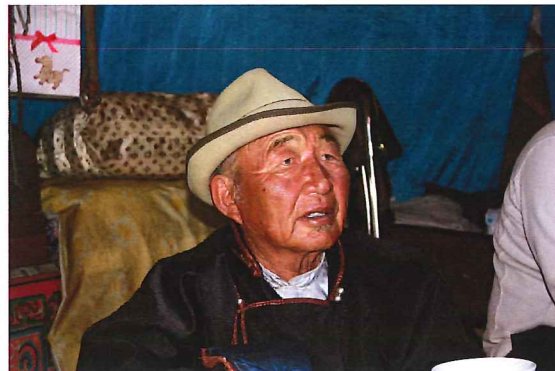


写真12 インタビュー調査

また、遊牧民の多くは病院に来院せず、バリアッジ（民間療法を行う者）が外傷の治療を行うことが多いことが、遊牧民患者家族よりのインタビューにて明らかとなった。

遊牧民へ往診する際に、ケガの注意点などの資料を作成し、持参・配布・指導を行うことが重要であると痛感した。

# 日本伝統治療（柔道整復術）指導者育成・普及プロジェクト

## 伝統的准医師クラス講習会

団 長：金井 英樹（国際部）  
横田 良介（宮城県柔道整復師会）  
浪尾 敬一（香川県接骨師会）  
村上 陽美（広島県柔道整復師会）  
河村 亜希（国際部）

指導者候補：エンフタイワン・トゥブシンバヤル  
ダシュラウダン・ボロルトウーヤ  
オユンバートル・ダリルチュルン  
ムンフバートル・ボロルチメグ

JICA 草の根技術協力事業パートナー型日本伝統治療（柔道整復術）指導者育成・普及プロジェクトの活動の1つとしてカウンターパートであるモンゴル国立医療科学大学附属看護学校伝統的准医師クラスの3年生31名に対して5日間の講義を実施する。

今回の講義は、完成したテキストを使用し、指導者候補をメイン担当として進行する。また、NHKワールド「side by side」の取材同行も控えており、本プロジェクトを公に広報する機会となっている。

### 日 程

9月8日：開講式・講義第1日目

(1) 開講式 9:00～10:10

- ①挨拶 モンゴル国立医療科学大学附属看護学校 バイガル 先生
- ②挨拶 公益社団法人 日本柔道整復師会 国際部員 金井 英樹
- ③挨拶 モンゴル国立医療科学大学附属看護学校 看護部長 ソロンゴ 先生
- ④プロジェクト概要 公益社団法人 日本柔道整復師会 国際部員 河村 亜希
- ⑤教科書受け渡し



(2) 講義

10:10～14:30 基本包帯理論・実技

14:30～15:40 固定材料作成

最終学年の3年生に授業を実施したが、包帯固定は未経験の様子であったが、講義が始まると受講生

たちは熱心に練習に取り組んでいた。シーネ作成は、ボロルトウーヤ、ダリルチュルン、ボロルチメグをメイン担当として実施し、作成のポイントや注意点を説明し講義を実施できていた。



(3) 臨床実習 15:50~16:20

(4) 日本モンゴル医療学会参加 14:10~16:00

9月7日~8日に行われた Mongolia-Japan medical forum に招かれ、8日午後から浪尾派遣員、金井国際部員とトゥブシンバヤル氏の3人で参加した。このフォーラムはモンゴル国立医科学大学の教授たち、日本の大学（獨協医科大学、東北大学、東邦大学、徳島大学、愛媛大学、昭和大学、愛知学院大学、長崎大学、医療法人生生会）の学長、研究科長ら、JICA 所長、国会議員などそうそうたるメンバーが一堂に会し、モンゴル国での医療サービスの質の向上を目的としたものであった。17年近くモンゴルの医療協力を行ってきた日本口蓋裂協会常務理事の夏目先生が座長となって行われた round table discussion ではモンゴルの医療体制に触れ、現在モンゴルで治療できない33疾患に対し一疾患でも多く治療可能とするために早期診断をすることが大切で、人材育成が不可欠とのテーマで議論がなされた。そのためのツールとして telemedicine を導入し、現地のみでなく国内においても指導、教育ができるようなネットワーク構築が必要だとの意見が出た。

日本の大学が医療協力する上で、その大学の専門分野などの特徴はモンゴル側でも入手困難な情報もあるため、できるだけ一つの機関によってモンゴルの医療状況に必要な情報をまとめ、提供できるように整備していきたいとのことであった。そのほか海外からの医薬品の輸入の問題にも触れ、活発な意見交換がなされた。

次年度、モンゴルで開催予定の「国際伝統医学学会（仮称）」の準備のために参加させていただいたが国際医療協力のために大変参考になるフォーラムであった。



9月9日：講義第2日目

(1) 講義

8:00～9:30 橈骨遠位端骨折理論

9:40～15:00 橈骨遠位端骨折実技

指導者候補生であるツブシンバヤル氏による Colles 骨折の講義を行った。前日の夜からプレゼンテーションを何度も確認し、指導するうえでのポイントをピックアップし準備を万全にして講義にのぞんだ。彼はモンゴル国内でコーレス骨折の治療経験が複数回あり、整復・固定の要点をしっかりと理解していた。また先週滞在したホブド県で派遣員とともに治療をした動画も交え、視覚を使った指導法も生徒たちに好評であった。看護学校でも本日からテキストブックを使ったため、今まで以上に生徒の理解力があつたように感じた。今年を受講生も熱心に受講する姿がとても印象的で、派遣者のみならず指導者候補生の意気込みも強く感じられた。



(2) 骨折患者の経過観察（下腿骨両骨骨折）、インタビュー 13:00～13:30

(3) 柔道連盟訪問 16:20～19:00

ナショナルチームに対する治療

(4) カイエンとの打ち合わせ 19:30～20:00



9月10日：講義第3日目

(1) 講義

8:00～10:30 鎖骨骨折理論

10:30～15:30 鎖骨骨折実技

今回の鎖骨骨折の講義は指導者候補ダリルチュルン、浪尾先生を中心として実施した。ダリルチュルンの鎖骨骨折に対する理解はある程度のものがあったが、講義進行には未熟さがあり、その都度助言をして改善できるように努めた。

昨日と同様、学生が熱心に講義に取り組む様子が見られ、講義の最後には10人程度の学生から質問の依頼を受けた。

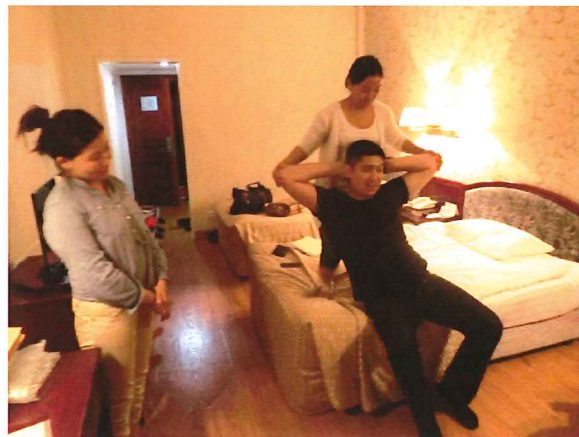


(2) 臨床実習（ダリルチュルン、ボロルチメグ）

15:40～19:00 右膝内側側副靭帯損傷、右膝外側半月板損傷、両膝関節症、腰椎脊柱管狭窄症、左足関節捻挫、腰椎椎間板症（2名）

19:30～20:00 腰椎椎間板症

看護学校の学生および教職員で痛みのある人に対し、診断および治療の進め方について指導を行った。今年6月から8月にかけて日本研修を行った二人の指導者候補生は、評価および治療法について今まで以上に学ぶことができ、前回モンゴルで行った臨床実習の時よりもスムーズに問診、評価が行えたように感じる。急性損傷の症例もあったため、引き続き明日も経過観察を行うよう指導者候補生に促した。





9月11日：講義第4日目

(1) 講義

8:00～10:30 肩関節脱臼理論

10:30～16:30 肩関節脱臼実技

講義は指導者候補ボロルチメグ、浪尾先生を中心として実施した。



(2) 臨床実習 (ダリルチュルン、ボロルチメグ)

16:40～18:00 陳旧性肩鎖関節脱臼、胸郭出口症候群、右膝関節 MCL 損傷

右膝関節 MCL 損傷に関しては経過観察、包帯固定を再度実施した。



9月12日：試験日

- (1) 筆記試験 8:00～9:00
- (2) 実技試験 9:00～13:00



(3) 閉講式 13:00～14:00

司会：浪尾敬一

- ① 成績優秀者表彰
- ② 総評
- ③ 挨拶 モンゴル国立医療科学大学付属看護学校 オトンゴア学長
- ④ 挨拶 公益社団法人 日本柔道整復師会 横田良介
- ⑤ 記念撮影



(4) 臨床実習（ダリルチュルン、ボロルチメグ）

14:30～15:30 両下腿骨骨折、第1腰椎椎体圧迫骨折・椎間板ヘルニア疑い

今回の大学での講義の状況とそれに対して、課題と対応を考察し振り返る。

まず、モンゴル語のテキスト・ハンドブックを用いての講義は、生徒から大変好評であり、成果としてあらかじめ講義の予習をしてきた学生多く見受けられた。

テキストを用いる授業により、理解度を深めることとなったが、今後、カウンターパートならびにモンゴル人指導者候補ともに様々な外傷治療に対して応用力を得ることのできる講義の進め方を検討していく必要がある。

指導者候補に関しては、外傷治療に対してある程度理解力がある様子であったが、座学、実技ともにまだ聴講者に伝達することが上手いかない様子であり、今後は、スライド作りにくわえ、特に実技でのデモンストレーション技術を向上させていくべきである。

また、臨床実習に関しては、診察をメインに指導者候補に実施してもらいながらフィードバックを行った。特に気になった点として、問診の取り方や、鑑別診断の方法、それから徒手検査に関して、実施は可能であるが、徒手検査の意義への理解が不足している様子であった。以上の点はその都度フィードバックしていったが、10月に控える日本研修を中心として再度理解を深めるように指導していく。

プロジェクトの終了に向けて、柔道整復術の講義活動とともに、モンゴル人柔道整復術指導者育成も大変重要である。指導者候補はプロジェクト期間残り2年で完全に私たちから自立し、柔道整復術の指導・普及のすべてを担っていく事になる。講義活動とともに柔道整復術で対応できる臨床能力の向上にさらに努めていく。